

佐賀瀬川・下荒井を通過して城下町へ通じた。下荒井はその時宿駅に当てられ、道路と村がほぼ現在のよう形につくりかえられたと思われる。ただ現在、道路の排水路は両側にあるが、これは車輛交通の発達してからの近年の改装で、もとは中央に水路があって、その両側に道路があるように町割りされた。十二所新田の開発新田の町割りもそうであったし、若松の馬場町・馬喰町なども明治時代までは、道路の中央に堀が通っていた。いま辛うじて猪苗代湖東にある原村の一部にその名残を止めている。

この銀山には幾度も盛衰があり、その時折で、下荒井村の交通量も変り、繁栄にも盛衰があったと思う。本田の西、十二所分に、道路の北側田圃の中に一里壇という小さな壇があった。これを取りはらっても、その跡が一区画になって残っていたというが、今、行ってみたら、もうその跡はなかった。その南に、きつね壇というのが一對をなしていた。これは藪になって狐などが住んでいたからの俗称で、壇には榎の古木があったというから明らかに一里壇の双対のものであったと思う。

会津藩では正之の代の寛文七年（一六六七）四月一日を期して、今まで六町を一里としていた単位を、一里を三十六町とするよう改めたが、同時に領内の街道に一里塚を築かせている。正之は正保元年（一六六四）三たびこの銀山を開坑しているから、一里塚のことは、「家世実紀」には主要道路だけで、銀山街道のことは見えないが、多分この頃つくられたものと思われる。基準は高さ約三メートルに周囲約二〇メートルで、上に榎を植えたとある。塩川町北端の県の史跡として指定した一里塚なども、やはりその頃の構築と思われる。しかし鶴沼川には銀山橋を架しても、大川に蟹川橋を架することは容易でなく、やはり河原を渡り、板橋を部分的に架していたことは、後々までつづくことになる。

2、高田街道の推移 現在下米塚の東南に川原町という、やや屋並みの揃った部落がある。河原の開拓が進み